寄せ太鼓

北九州市立長崎街道
木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬
三丁目16番26号(〒807-1261)
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

長崎街道 ひなまつり!!

3月26日(日)まで開催

※立場茶屋銀杏屋は3月12日(日)まで

今年の「長崎街道ひなまつり」が2月11日(土・祝)から始まります。平成8年頃から「もやいの家」で寄付を受けたひな人形を座敷に飾ると多くの来館者が訪れたことをきっかけに、以前から開催していた立場茶屋銀杏屋、新しく旧高崎家住宅、木屋瀬宿記念館、江戸あかりの民藝館を加え「長崎街道ひなまつり」が開催される事になりました。(「もやいの家」は令和元年に閉館)

この「長崎街道ひなまつり」も今年で11回目の開催となります。展示を行う文化施設4館では、それぞれ思考を凝らしており長崎街道の面影を残す町並みと共に来館者に感動を与えます。

長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会　広報部会会長　藤　政文

【長崎街道木屋瀬宿記念館】

みちの郷土史料館にて、ひな人形の展示と歴史などを紹介するとともに、天保時代に制作された「天保びな」や、現在では珍しい「御殿びな」、「三歌人」のひな人形なども展示します。

先ずはみちの郷土史料館を訪れて、ひなまつりや長崎街道の豆知識を得て他の施設を巡ってはいかがでしょうか。

【旧高崎家住宅(伊馬春部生家)】

天保7年(1836年)の町家形式を残す建物が貴重であることから、一般公開されています。江戸時代のひな人形を含む、約1700体のひな人形が建物中に並び飾られていて、江戸時代の建物と相まって幻想的な雰囲気が有り、来館者を楽しませてくれます。

【江戸あかりの民藝館】

館長の佐藤伸一氏が収集している、江戸時代の大名家や武家由来の「ひな道具」を展示します。その「ひな道具」は実物の道具を製作する職人の手によって作られて、非常に精巧な仕上がりとなっています。

展示場である大正時代の豪壮な建物と貴重な「ひな道具」の数々を見てお楽しみ下さい。

【立場茶屋銀杏屋】

現建物は天保7年(1836年年)10月の火災焼失後の天保8年再建築であり黒崎宿と木屋瀬宿との間宿として、諸大名などが休憩に利用した建物です。「大名びな」と呼ばれる手作りの「巨大びな」や、色とりどりの「さげもん」、表には小さく可愛らしい竹びなが並び来館者を歓迎します。

令和四年度 子供恵比須頭(かしら)

世話人代表　権堂　良佑

令和4年12月10日(土)・11日(日)に、10名の児童による令和4年度「子供ゑびす頭」が執り行われました。この行事は、木屋瀬に江戸時代から伝わる由緒あるもので、男児が数え年で11歳になると頭(かしら)と呼ばれ、地域の若衆(大人)の仲間入りをする儀式として始まりました。現在では小学校4年生を頭とし、執り行っています。

新型コロナウイルスが様々な行事に影響を及ぼす中、十分な感染対策を講じ、11月中旬から太鼓・采振りの練習を始めました。最初はほとんどできなかった子供たちが、柳　勝二氏をはじめ、木屋瀬青年会や地域の方々の大変熱心なご指導の結果、本番ではしっかりと太鼓・采振りを行うことができ、子供たちの成長に感心させられました。

当日は多くの加勢人にご参加いただき、笹山車を巡行することができました。その中で子供たちは、練習で頑張った太鼓・采振りの成果を地域の皆様に披露することができました。子供たちは、木屋瀬の伝統行事を経験したことで、故郷を愛する気持ちやこの先の様々な困難も乗り越えられる力を育むことができたと思います。

私も子供の頃、この行事に参加しました。今回は、親としてこの行事に関わらせていただく中で、木屋瀬町内の皆様の地域を想う心や、この地域で暮らす子供たちの健やかな成長を願う心が、昔から変わることなく引き継がれていることの素晴らしさを再認識する良い機会となりました。

結びに、この行事の準備から本番までご協力いただきました氏子総代会をはじめ木屋瀬町内の皆様方、またご芳志をくださいました皆様方に令和4年度子供ゑびす頭の関係者を代表し、心より厚く御礼を申し上げます。

筑前木屋瀬　第16回 今昔歳事記

紅屋泰助氏(故　柴田泰助氏)の「筑前木屋瀬今昔歳事記」の第16回目です。今回は、「ひろば北九州」平成22年12月号の行事・風物について、前編としてご紹介させて戴きます。

三日ゑビスを今風に〔恵比須祭〕

年の瀬の師走は〔筑前木屋瀬恵比須祭〕と〔子供ゑビス・頭〕をご紹介させて戴きます。

三日ゑビスの伝統を再生

先ず〔筑前木屋瀬恵比須祭〕は宿驛往時からの伝統行事「三日ゑビス」のことで、12月の3日に執り行われます。元来は旧長崎街道筋の町内ごとに執り行われ「恵比須御座」と呼ばれておりました。

私の生れ住む本町では、町内の戸数分の恵比須膳の什器と裃袴が備えられ「昭和の中頃までは当元亭主役の采配のもと、男手だけで恵比須座(祭祀と直会)は厳粛に執り行われていた」と聞いております。恵比須の日、各家は床の間に恵比須様の像や掛け軸を奉り、水盤に活かし鮒と恵比須膳(小豆ご飯・寒鮒と大根の膾・寒鮒・輪切りの大根を炊いた煮凍り大根など)を供えました。この習慣は、私の家でも祖父の存命中までは続いて居ました。又、恵比須用の寒鮒を売り歩く寒鮒売りの姿も、木屋瀬の風物でございました。此の伝統行事は途絶えかけて居りましたが、昭和45年の須賀神社参籠殿修復を機に、木屋瀬全町住民の恵比須御座として復活させ、〔筑前木屋瀬恵比須祭〕を命名されました。当元亭主役は代々の木屋瀬商工連盟会長が務めて居ります。尚、木屋瀬の恵比須は夜も明けきらぬ早朝より執り行うのが伝統でございました。しかし、当今の車社会に於いて御神酒杯戴の儀は出来兼ねる事情もございます。よって、接待の内実は古式に則るも、近年は宵恵比須へと移行すると共に世情に合わせた形式で執り行って居る次第です。この件につきましては当初、恵比須信仰の余程厚いと思われる方から「伝統が損なわれる」などの批判も受けました。しかし、先人達は時代の変化と状況に合わせて伝統行事を復活・継承されてきました。私たちも温故知新の精神と創意工夫を以って、廃れ行く「木屋瀬三日ゑビス」の継承と発展を目指す取り組みが肝要と思う処です。

万人に開かれた御座

さて〔筑前木屋瀬恵比須祭〕の御座の式次第をご紹介します。先ず2千円の御座券を予約購入された御座客は須賀神社の受け付けで着座番号の木札と交換します。社殿にて祭祀が執り行なわれた後、参籠殿の指定番号の御座席に着座します。席には持ち帰り用の恵比須膳の弁当と御神酒、宿場煎餅、おひら(祝蒲鉾)が用意されて居ります。

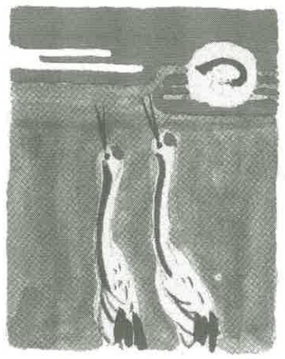
着座後、当元亭主の采配により木屋瀬流の手入れの「一番手」で御神酒を杯戴。「二番手」で御神号・神前神酒・紅白餅・末広・福引神酒の抽籤を行います。「三番手」が入ると参籠殿下の接待処に移り、燗酒・うどん・おでん・ぜんざい等の接待を受け、古き良き時代の伝統行事の宵をお過ごし戴くと云う算段となって居ります。此れが「一番座」から「二番座」「三番座」と順に続くのでございます。

つづく(記念館)

いろはかるたのご紹介

つ　鶴(つる)が群(むら)れ飛(と)ぶ木屋(こや)の関(せき)

遠賀川の後背湿地帯に位置する木屋瀬周辺。昔は鶴をはじめ多くの渡り鳥が飛来して、田の落穂や泥鰌・田螺・ビイナ等をついばみ、群れ遊ぶ様子が見られたと伝えられ、「鶴の畑」という字名もございます。



全町恵毘須お座 —— 盛大に執り行なわれました!!

宿駅往時より商売繁盛の神として祀られてきた恵毘須様。昔は町内毎に行われていたそうで、座元の家の門に笹をたて、しめ縄を張り、手水や手拭を備え、お座の正面には、恵毘須様が祭られていました。祭前夜、当元は提灯を下げお座の案内に回っていたそうです。祭当日の朝、お座を知らせる太鼓が鳴り渡りまだ明けやらぬ早朝、お座が開かれていました。現在は戸数も減り全町あげての恵毘須祭りという形になっています。

木屋瀬商工連盟　会長 八尋 弘文

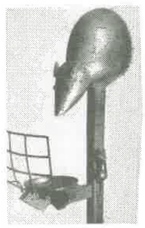
今年の謝恩セールでは、特別賞を取りやめその分を扇天満宮の復旧支援に当てさせていただきました。恵毘須祭の開催に際し、ご協力を賜りました多くの皆様に心より感謝しお礼申し上げます。

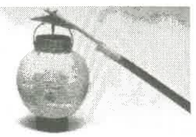
シリーズ 文化の薫る町 木屋瀬 第七回

江戸あかりの民藝館を訪ねて

木屋瀬の町並みがいつの時代から整備されたかは不明ですが、室町時代、飯尾宗祇が書いた筑紫道記（1480）に木屋瀬の陶氏の館に泊まったことが書き残されていますので、そのころからすでに河港として栄えていたものと伺えます。長崎街道の宿場町として様相を呈したのは慶長十七年冷水峠が開通してからと思われます。平成七年の調査によると通りに面した伝統的建築物が八十八軒、江戸期の建築物が十二軒、明治の建物が四十八軒、大正九軒、昭和七軒、不明十二軒になっています。明治四十年に大火災があり、本町中町の町屋が被災し宿場造りから商家に一斉に建て替えられ人も生業も大きく入れ代わりました。西構口方面では江戸期に建てられた宿場時代の建物が健在し、大庄屋の松尾家や舟庄屋の梅本家も現存する。木屋瀬は幕藩体制が終わり明治の時代になってからも、新たな石炭産業と川船の運送で町は活況を示し時代を代表する建築物だけが次々と建ち家並を構成しました。特に東構口に向かい合わせに建つ二軒の大型の木造建築は、木屋瀬の町屋建築の到達点と位置付けられる建築物です。木材、材質、細工、形状、見事な町屋です。黒崎方面に向かって立つ右側の建物がこの度訪ねた菜の花診療所「江戸あかりの民藝館」です。館長の佐藤伸一医博を訪ね、この建物を購入された経緯や江戸あかりの民藝館を開館された心境や展示品等についてお尋ねしました。若い時外国に留学した時の影響か日本文化や工芸品に関心を持っていたので、開院する時は季節感のある場所で地域に貢献ができる医業ができればと思っていました。幸い縁がありこの家を購入することが出来開院しました。その後、趣味で集めた日本古来の文化である、行燈（あんどん）、灯篭（とうろう）、灯台（とうだい）、ランプ等灯火器（とうかき）を中心とした民芸館を開館しました。あかりの歴史は古く人類の発展と共にあります。大きく変化したのは、仏教伝来とともに、佛殿の荘厳に灯篭や灯台が使われ日本の灯火文化に大きな影響を及ぼしました。とくに江戸時代は経済の繁栄の影響を受けあかり文化を豊かにしました。飾り灯台や自在灯台、無尽灯（むじんとう）、行燈、提灯、等用途にあわせていろいろ作られました。明治以後も、ランプやガス灯、カンテラ等が使われましたが電気の普及とともに過去の遺物となり明かりの道具達は忘れ去られました。そのようなあかりの道具達を集めた民芸館です。建物は二階建て、横五間、壁面は鼠漆喰、二階に銅板張りの窓を設け妻入り入母屋造りの瓦葺きです。店の間は吹き抜けで、座敷、仏間は折り上げ格子天井として重厚な佇まい、二階は座敷で一階の店の間と座敷が展示場で欄間の飾りが見事です。大黒柱は天井まで届く欅の一本物、どの材料も細工も現在では手に入らない逸品ものばかりです。木屋瀬の景観にとって欠くことのできない建物で、永く空き家であったこの家が有効活用されていることに感謝し辞しました。

江戸あかりの民藝館　前景


鼠灯台（鼠の口先から油で出て長く使える画期的な灯台）


馬上提灯（揺れの激しい馬上で使える細工がされた提灯）

行燈（武士が多く使用した鉄脇の行燈）

本堂に燈明ひとつ寒勤行

本町　野口靖彦

思い出話

わたしの昔話

「水かぶり」さんが来ていた

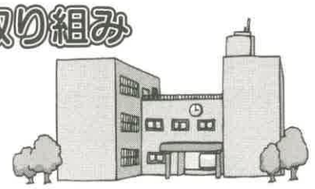
一年に一度英彦山の山伏さんが三人組で来ていた。白装束に高下駄、一本歯の下駄の人もいた。ホラ貝を吹き鳴らし錫杖を鳴らし何かを唱えながら凄い様相で町中を行く。折り返しからは水をかぶりながら進行する。荒行をするのである。人々もこれを知っていて門先に水桶を出す。家々の門先に出された水を町の通りの中央で頭からザーットかぶる様は実に物凄い事であった。見ている方が震えていた。天狗ではないかと怖かった。

東の福智山系と西の六ケ岳山系の谷を流れる遠賀川から吹き上がる凧があった。凧はよく上がる所である遠賀川の堤防の上からの凧揚げが盛んであった。大人が何人かかかって揚げる大型もあった。それぞれの凧に籐を薄くテープ状にしたものを凧の裏に弓なりに張っていた。これが凧によってうなりを上げるのである。勇ましい事であった。気流に乗った凧は、凧を何かにくくり付けて置けばいつまでも空でうなっていた。チャンカケと言って凧と凧の戦いもあった。相手の凧糸を切って落とすのである。

本町　柴田由美子

柴田豊廣遺稿集より

木屋瀬小学校3年生「総合的な学習」の取り組み



今年度の3年生は、総合的な学習の時間を使って、「木屋瀬のことを未来に伝えよう」という取り組みを行っています。歴史あるこの街を誇りに思い、これから出会うたくさんの人に伝えていけるように学ぼうというものです。1学期には「木屋瀬のことを知ろう」を目標に校区探検にいき、木屋瀬小学校から見て東や西の方角にあるものについて知りました。

2学期には「木屋瀬について学ぼう」を目標に西側の地域にもう一度行き、街並みをじっくりと見て、わかったことや、不思議に思ったことなどを発表しました。

しかし、「わかったこともあったけど、まだまだわからないことやもっと知りたいことがある！」ということで、教師だけではこの先進めていく上での難しさを感じました。そこで、先日行われた「宿場まつり」に行き、なにかヒントになるものはないかと探していたところ、木屋瀬記念館で「まちなみ案内ボランティア」に出会うことができました。

実際に歩きながら話を聞くことで、子どもたちは疑問に思っていたことや、知らなかったことがわかり、「木屋瀬は歴史あるすごい街なんだな」と感じていました。教師自身も、木屋瀬の歴史を知ることができ、とてもいい勉強になりました。

来年度も、地域の方と一緒に地域学習に取り組んでいく、この取り組みが続いていけばと思っています。学習に携わっていただいたことに感謝しています。ありがとうございました。

木屋瀬小学校　3年学年主任　梶田　啓子